



サッカーワールドカップ開催国ロシアと縁が深い日本人3選



サッカーワールドカップ（W杯）がいよいよ開幕。開催国のロシアは実効支配地が日本本土から3.7km先と、最も近い隣国でもある。両国の交流の歴史は長く、5代将軍・徳川綱吉の治世だった1705年（宝永2年）にピョートル1世が当時の首都サンクトペテルブルクで「日本語学習所」を開設している。

米国の黒船来航よりも75年早い1778年にはロシア皇帝の勅書を携えたイワン・アンチーピンが松前藩を通じて日本との外交樹立を求めた。明治以降は日露戦争やシベリア出兵などの武力衝突もあったが、太平洋戦争では日本政府が旧ソ連を仲介役とした終戦工作を模索するなど両国の外交的な関係は深かった。

そこでロシアと関係の深い日本人3人を紹介する。サッカー観戦の合間に日ロ関係の歴史に思いを致してみてもいかがだろうか。

高田屋 嘉兵衛…民間の力で一触即発の日露紛争を解決
高田屋嘉兵衛の肖像画（高田屋顕彰館ホームページより）

司馬遼太郎の小説「菜の花の沖」で知られる高田屋嘉兵衛（たかたやかへえ）は1769年2月7日に淡路島で生まれ、廻船商人として活躍する。箱館（現・北海道函館市）に進出して国後島・択捉島間の航路開設や漁場運営と廻船業を営んでいた嘉兵衛は、ゴローニン事件に巻き込まれた。

1804年9月、長崎に来航したロシア使節レザノフが幕府から通商交渉を拒否された腹いせに、部下のフヴォストフらに命じてサハリンやエトロフの日本人やアイヌ人を襲撃する「文化露寇」が起こり、日露関係は緊張の極致にあった。

7年後の1811年5月、千島海域の地理調査に当たっていた露軍艦ディアナ号のゴローニン艦長らが幕府に捕縛される。その報復として嘉兵衛が1812年9月にディアナ号に拿捕され、カムチャツカ半島のペトロパブロフスク・カムチャツキーへ連行された。

連行先の少年からロシア語を学んだ嘉兵衛は、ディアナ号副艦長でカムチャツカの長官となったりリコルドと直接交渉する。リコルドに交渉を任された嘉兵衛は幕府側に事件のロシア側の真意を説明して交渉のきっかけを作り、日露間を往復しながら会談の段取りを整えた。

その頃には幕府の外交方針もロシアとの紛争不拡大へ転換しており、「文化露寇はロシア皇帝の命令に基づくものではないことを公的に証明すれば、ゴローニンを釈放する」と回答。リコルドがこれに応じて、1813年9月に幕府はゴローニンを釈放。嘉兵衛はディアナ号で箱館を離れるゴローニンを見送り、事件は無事解決したかのようにみえた。

ところが当の嘉兵衛が海外渡航を固く禁じていた幕府から密出国の罪人扱いされて、箱館・称名寺で監視を受ける身に。1814年3月ようやく「出国したのは自らの意思ではなく、ロシア船に拿捕されたため」と認められ、無罪が確定した。同5月に幕府からゴローニン事件解決の功労金として金5両を下賜され、1826年には故郷の淡路島を治めていた徳島藩主・蜂須賀治昭から小高取格（300石）の藩士待遇

に処遇される。

しかし、高田屋には過酷な運命が待っていた。実は嘉兵衛はゴローニン事件の交渉に併せて、海上で遭遇した際に高田屋の船が店印の小旗を、ロシア船が赤旗をそれぞれ掲げて確認し合うことでトラブルを回避する「旗合わせ」をロシア側と取り決めていたのだ。1827年に嘉兵衛が亡くなると、「旗合わせ」の存在を幕府に隠していたことが露見。1833年に資産没収のうえ箱館からも追放され、北方貿易で巨万の財をなした高田屋は没落する。明治維新の35年前の出来事だ。

もし高田屋が明治まで生き残ったならば、北海道を地盤とする財閥が成立し、民間主導による日露交流も盛んになっていたことだろう。北海道開拓はスピードアップし、日露戦争を回避できた可能性もある。高田屋が健在であれば、日本の近代史は大きく変わっていたかもしれない。

高田屋は明治を迎えられなかったが、ロシアとの平和的な紛争解決や箱館繁栄の礎を作った嘉兵衛の人気は衰えなかった。1911年に北方開拓の功績で正五位の冠位を追贈、1938年には北海道神社（札幌市中央区）の境内にある開拓神社で、間宮林蔵や伊能忠敬らとともに祭神として祀られている。

箱館高田屋嘉兵衛資料館（函館市公式観光情報 はこぶらより）

函館市には高田屋造船所跡地に明治になって建てられたコンブ倉庫を改修した「箱館高田屋嘉兵衛資料館」がある。高田屋の半纏（はんてん）や、嘉兵衛が箱館に乗り込んだ北前船「辰悦丸」の復元模型、当時の箱館を描いた巨大な絵図などを展示している。函館市電・十字街電停で下車し、徒歩5分。入場料は大人（高校生以上）300円。

生誕地の淡路島にも「高田屋顕彰館・歴史文化資料館」（兵庫県洲本市）がある。こちらは神戸三宮バスターミナルから「高田屋嘉兵衛公園行き」の直通バスで、所要時間1時間30分。入場料は大人500円、大学・高校生300円。

間宮 林蔵…対露防衛の礎となる地理情報を収集

間宮林蔵（まみや りんぞう）は200年以上前の1809年に、ロシアに渡りアムール川下流を探検した。当時ロシアの軍艦がエトロフ島を襲う事件（シャナ事件）が起こるなど、北の海でロシアの活動が活発化していたため、幕府の命によりカラフト探検を行う中で、大陸に上陸した。

間宮林蔵の像と生家

この探検の時にカラフトが島であることを確認しており、後にシーボルトによってカラフトと大陸の間の海峡を間宮海峡として紹介された。

大陸では清国（中国）の役所があったアムール川下流の町デレンを訪問し、清国の役人から日本人であることが珍しがられ歓待されたという。当時の大陸では清国の活動も活発で、ロシアが極東地域を十分に支配していなかったことが分かる。

幕府の命で国後島に派遣されていた際には、伊能忠敬に測量技術を学び、1803年に蝦夷（北海道）の日本海側とオホーツク海側を測量し、地図を作製した。

間宮林蔵は1780年茨城県つくばみらい市の小貝川のほとりに、農民の子として生まれた。生家は保存されており、現在は生家の隣に間宮林蔵記念館がある。記念館には間宮林蔵が描いたカラフトや蝦夷の地図が展示されているほか、カラフト探検時に使用した頭巾や幕府に提出した報告書などを見ることができる。

間宮林蔵記念館

間宮林蔵記念館は、つくばエクスプレスの守谷駅から関東鉄道バスで15分ほどの稲豊橋バス停から、さらに歩いて15分ほどの場所にある。建物の前面には広々とした水田が広がっており、当時の農村の様子が浮かび上がってくる。

守谷駅からのバスは1時間に1、2本しかないので、待ち時間は覚悟しなければならない。タクシーだと料金は2000円弱。記念館の入場料は100円。帰りは記念館の事務所でバスの運行時間を教えてもらえるので、待ち時間なしに守谷駅に到着できる。

東郷 平八郎…世界最強のバルチック艦隊を撃破
東郷神社（東京・神宮前）

「アドミラル・トーゴー（東郷提督）」。世界から尊敬を込めてこう呼ばれる東郷平八郎（とうごうへいはちろう）。日露戦争で連合艦隊司令長官として指揮し、最強とされたロシアのバルチック艦隊を日本海海戦（1905年5月）で撃破し、世界海戦史に刻まれる勝利を成し遂げた。日本軍はこの戦いで海に投げ出されたロシア兵を残らず救助し、十分な食事を与えるなど捕虜への紳士的な対応でも高く評価された。1926年11月には、国際ニュース誌「TIME」の表紙を日本人として初めて飾った。かつて世界で最も有名な日本人といえば、東郷だったのだ。

日本海海戦で東郷司令長官が乗艦した旗艦の戦艦「三笠」はマストにZ（信号）旗を掲げ、「皇国の興廃この一戦にあり各員一層、奮励努力せよ」との号令を伝えた。一国の存亡をかけた戦いで大勝利を収めたことにちなんで、その後、難事を打開する場合に「Z旗を掲げる」という慣用語ができたと言われる。

東京・神宮前にあるのが「東郷神社」。1940年5月に英雄・東郷をまつる勝利の神社として建立された。JR原宿駅・東京メトロ明治神宮前駅から徒歩で約10分、明治通り沿いにある。勝運のパワースポットとして人気を得ている。

東郷は薩摩藩（鹿児島県）に生まれた。明治維新後、1871年、24歳で英国海軍に官費留学し、国際法や船乗りの技術を学んだ。日清戦争で浪速艦長として活躍し、海軍大学校長、常備艦隊司令長官、舞鶴鎮守府司令長官などを経て、1903年に連合艦隊司令長官に就いた。日露戦争後の大正期、東郷は東宮御所学問所総裁を7年間務め、昭和天皇の教育を受け持つ大役を果たした。

東郷連合艦隊司令長官の像と記念艦「三笠」…三笠公園内（神奈川県横須賀市）

連合艦隊の先頭に立った戦艦「三笠」は現在、神奈川県横須賀市の三笠公園に記念艦として、その姿を残している。1926（大正15）年に記念艦三笠として保存されたが、第二次大戦後は、解体処分のピンチなどを切り抜け、1961年に改修工事を行い、接收された装備品も返還されて、往時の雄姿を取り戻し、現在にいたっている。艦に足を踏み入れると、戦艦（全長122メートル、幅23メートル）のリアルな様子がひしひしと伝わってくる。展示物も充実し、見どころ満載だ。

この記念艦「三笠」は京急線横須賀中央駅から徒歩で約15分。観覧時間は9時～17時30分（冬場は閉館時間が早まる）。観覧料金は大人600円、65歳以上500円、高校生300円、小・中学生無料。

文：M&A Online編集部